

かささぎ通信 第160号

毎月第2金曜日 13:30~15:30

2026年 6月 12日 発行

刈谷市中央図書館研修室 参加自由

森三郎刈谷市民の会「森三郎の作品を読む会」

2026年5月の「森三郎の作品を読む会」では、
「麝香（じゃこう）おうむ」（こどもの国文庫1『魔法』、四国出版、1947年11月）、

「アオイの大臣（おとど）」（『幼年童話集 帽子に化けたクロネコ』東京一陽社、1949年2月）を読みました。

「麝香（じゃこう）おうむ」は終戦二年後に発表されました。

「私」は友人の画家・近藤君の引っ越し先を訪ねるために焼け跡の場末の町を歩いていました。途中、爆弾の被害にも遭わなかったらしい古風な横町に足を踏み入れました。どこからか麝香のような匂いがしています。私はふっと古道具屋に入り込みました。天井からはからっぽの鳥かごが下がりつづいています。私が店主に声を掛けようとした時、「うるさい！」とどなる店主の声が店内に響きました。どうやら、からっぽと思い込んでいた鳥かごの中の鳥に向かって声を出したのです。「見たこともない、体中まづかな、目のさめる程美しい一羽のおうむ」が、とまり木の上でじっと目をつづっていました。

その後もあのおうむのことが気になっていた私は、ちよつとまとまったお金が入った時に、おうむを買おうと、古道具屋のある横町に出かけます。またあの不思議な匂いがして、私はそれをおうむの匂いと決め込んで「麝香おうむ」と呼んでいます。しかし古道具屋の天井からはからの鳥かごが下がりつづいているだけでした。

店主にどなられたあの麝香おうむは誰かに買われて行ったのか、初めから鳥かごの中には何もいなかったのか、「私」の中で思いが交錯します。この話を酒井晶代先生（森三郎刈谷市民の会顧問、森三郎研究者）に紹介すると、「赤いおうむは文字どおり「赤い鳥」ですね。」と返信をいただきました。また『赤い鳥』創刊号の扉絵にはおうむの絵があったことも書き添えられていました。

作品中の古道具屋の江戸の小話は、三郎が『赤い鳥』に無署名で

書いた「昔の笑話」（1933.11）の話です。この作品は終戦間際まで東京で暮らしていた作者の体験を映しています。森家の両親は歌舞伎が好きでした。一九四〇年の父の死後、母は上京し三郎と一緒に住みますが、四五年一月の三河大地震の後、様子を見るために刈谷に戻った母はそこで亡くなってしまいます。その後、結婚する予定であった三郎は三月に空襲で家を焼かれ、ちょうど郷里に戻る予定の詩人・与田準一から所帯道具もすべて譲り受け彼の下宿に移り住みます。しかし五月にはその下宿も罹災し、三郎は刈谷に戻りました。この話を執筆していた頃は、もう一度上京して作家としての道を進もうと模索していた時期です。オウムを手に入れることで運が向いてくるという期待と、止まり木の上でじっとしているオウムの「忍従」の姿とは、作者自身の相反する状況を映しているようです。初出コピーには「私」のように文字が逆さになっている箇所があつて、一文字ずつ活字を拾う活版の時代が分かるという声もあり、会は盛り上がりしました。内容だけでなく、外観からも世相が見て取れました。

「アオイの大臣」は『森三郎童話選集 かささぎ物語』に収録されているので、すでに「読む会」で取り上げたことがあります（「かささぎ通信第77号」）。アオイの大臣の許嫁ヤマブキが、病の床にあつた大臣の命を救うために、魔女と取引をして自らはハトになります。西洋の話を、日本を舞台にして語る構成だと思われます。自己犠牲の在り方、それをだれにも知ってもらえない葛藤など、参加者から様々な感想が出て、にぎやかな会になりました。

〈次回予定〉2026年7月10日（金）午後一時半〜三時半、
刈谷市中央図書館第一会議室

「ひとりほノッポでひとりほチビ」（『少年少女』一一〇、
1948年12月）／「新葛の葉ものがたり」（『幼年童話集
帽子に化けたクロネコ』東京一陽社、1949年2月）